



## 日本インターンシップ学会での辻隆久先生のご足跡

——第2回榎本記念賞受賞と第16回大会の企画・運営を中心に——

安 孫 子 勇 一

**概要** 辻隆久先生は、近畿大学経営学部ご在任中に、日本インターンシップ学会に入会され、関西支部を中心に大活躍された。数多の足跡のうち、特に大きなご貢献である第2回榎本記念賞受賞（2017年）と、本学で開催された第16回大会（2015年）の企画・運営面を中心に、学会でのご活躍ぶりを報告する。

このうち、榎本記念賞は、日本インターンシップ学会が2年に1度、秀逸なインターンシップを対象に表彰する制度である。本学経営学部キャリア・マネジメント学科で実施している低学年向けインターンシップが高い評価を受けて、第2回唯一の「最も秀逸な事例」として表彰された。また、第16回大会の開催にあたって、八木章先生（辻先生のご前任）、筆者とともに行った10回以上の事前打ち合わせの場で多数の有意義な提言をされたほか、学会当日の運営でも幅広く目配りされるなど、企画・運営面で多大な貢献をされた。

**キーワード** インターンシップ

**原稿受理日** 2019年1月（6月に一部加筆）

## は じ め に

辻隆久先生は、本学経営学部にご着任後、日本インターンシップ学会に加入して下さり、関西支部を中心に大きな足跡を残された。同学会には、本学も法人会員として加入しており（窓口はキャリアセンター）、複数の本学教員が会員として活動している。

こうした足跡の中でも、辻先生は、第2回榎本記念賞（2017年8月の第18回大会で表彰）で本学が「最も秀逸な事例」に認定される過程で、非常に大きな貢献をされた。また、2015年9月に本学で開催された第16回大会では、前任の八木章先生と筆者と3人で企画・運営プロジェクトチームを立ち上げ、10回超の打ち合わせを通じて、多くのアイデアを提供していただいたほか、各種の事前準備や当日の運営においても、幅広く目配りしていただいた。

本稿の章別構成は以下のとおりである。

まず、第1章では、日本インターンシップ学会と、その関西支部（全国4支部の一つ）の概要を説明する。辻先生は、関西支部研究会で研究発表されたほか、関西支部運営委員として活躍されたり、「高良記念賞」の審査委員を関西支部代表として務められたりしている。

第2章では、「秀逸なインターンシップ」を表彰する「榎本記念賞」の概要と、第2回榎本記念賞での本学の受賞理由を説明する。もともとは経営学部キャリア・マネジメント学科の2年生を対象に実施していたインターンシップの授業科目について、配当学年を2016年に1年生に引き下げた辻先生のご英断と、キャリアサポート・オフィスの仕組み等を通じた木目細かな支援体制が、榎本記念賞ワーキンググループの審査で高く評価されたものである。

第3章では、2015年9月に本学で開催された日本インターンシップ学会第16回大会で辻先生が果たされた重要な役割を報告する。辻先生は、企画・運営プロジェクトチームのメンバーとして大会シンポジウム「大阪・兵庫・和歌山での地域連携の実例」の人選などで、多大な貢献をされた。また、「大会開催要項」や「大会プログラム・発表要旨集録」の印刷事務等のために、経営学部キャリアサポート・オフィス職員でいらした久米弥生さんの投入を認めて下さった。これら2冊子の印刷、「大会開催要項」の会員への発送、参加者への領収証の準備などで、久米さんが大活躍して下さった。当時、筆者は重い校務を背負って4～8月には身動きが取れない状態にあったため、筆者一人では到底開催に漕ぎつけることはできなかった。辻先生のタイムリーなご英断と、久米さんの事務処理能力の高

さに、深く感謝している。

第4章では、日本インターンシップ学会関西支部の今後の課題について、2019年の第20回大会を中心に述べる。

なお、本稿の資料編では、関西支部から榎本記念ワーキンググループに提出した本学推薦文を別添1として掲載する（第3章の資料との位置づけ）。これは、辻先生が書いて下さった初稿に、筆者が「推薦者のコメント」部分を加筆して提出したものである。また、八木先生、辻先生と筆者の3人で練り上げた第16回大会のプログラムを、資料編の別添2として掲載する（第4章の資料との位置づけ）。

## 第1章 日本インターンシップ学会とその関西支部

### 1-1 日本インターンシップ学会と関西支部の概要

1997年に、当時の文部省・通産省・労働省の合意に基づいて「インターンシップの推進に当たっての基本的な考え方」<sup>①</sup>が発表され、日本でもインターンシップを振興することになった。インターンシップに関心を持つ幅広い分野の研究者等が協議して、その1年半後の1999年3月に、学際的な研究を行う学会として日本インターンシップ学会を設立し、「設立趣意書」（日本インターンシップ学会（1999））を公表した<sup>②</sup>。ここでは、以下のように宣言している。

これまで、インターンシップの実践などを通じて種々の研究をしてまいりました私達は、インターンシップはあくまでも学校教育の一環として捉え、産学関係者の高い倫理と道義のもとにインターンシップが健全に発展、普及していくことを願い、今般学会を設立して一層の研究を続けて行こうとしております。

この学会は、設立当初には会員数40名の小さな学会であったが、次第に会員数を拡大し、本稿執筆時点では法人会員や学生会員を含めて250余の組織に拡大している。この間、2008年に日本学術会議より協力学術研究団体指定の通知を受けている。

会員数が拡大する中、学会理事会<sup>③</sup>内で「地方ごとに支部を作ろう」という意見が強ま

(1) 1997年9月18日にこの文書（三省合意と呼ばれる）が発表された後、2014年4月8日に一部改正が行われた：詳しくは、文部科学省ほか（2014）を参照。また、2015年12月10日に一部改正が行われた：詳しくは、文部科学省ほか（2015）を参照。さらに、2017年10月25日に、上記の基本的な考え方についての留意点をまとめて公表した：詳しくは文部科学省ほか（2017）を参照。

(2) 日本インターンシップ学会の設立の経緯や、その後10年間の取り組み等については、日本インターンシップ学会（2011）に詳しい。

(3) 筆者は、2005年秋～2017年秋まで理事会のメンバーであった（執筆時点では、連続多選禁止規定のため理事会から外れている）。このうち、2013年秋～2015年秋には、副会長を務めた（当時の吉本圭一会長〈九州支部所属〉の方針で、他の3支部長を副会長に任命したもの）。

り、第一弾として関西支部が2005年12月に設立された。初代の関西支部長は横本淳子先生（大阪経済大学：当時）、副支部長は加藤敏明先生（立命館大学：当時）と筆者の2名体制であった。その後、関西支部長は、2代目：加藤先生（2007/4月～2012/3月）、3代目：筆者（2012/4月～2017/3月）、4代目：廣瀬幸弘先生（立命館大学、2017/4月～）と続いている。なお、筆者は、初代のみならず、2代・4代支部長の下で副支部長を務めている。

支部設立の動きは他地域にも広がり、2008年6月に九州支部が、2010年3月に北海道支部が、2011年3月に関東支部<sup>(4)</sup>が設立された。こうして、支部ごとに役員（支部長、副支部長、支部運営委員等）を決め、支部研究会を開催するという所謂「4支部体制」が確立した。この結果、年1回開催される大会は4支部持ち回りで開催することが慣例化し、年に数回開かれる理事会も4支部持ち回り開催が恒例となっている。

## 1-2 関西支部での辻先生のご活躍

辻隆久先生は、関西支部の研究活動面では、2013年8月に開催された関西支部の第8回研究会で、酒井幸雄氏（帝人株式会社人財部長〈当時〉）と連名で「大学におけるインターンシップ教育の現状と企業から見た評価～近畿大学経営学部を取組を事例として～」を発表された。また、2017年6月に開催された関西支部の第12回研究会における岩井貴美氏（本学商学研究科院生&経営学部キャリアサポーター〈当時〉）の発表「低学年インターンシップ教育の取り組み評価～近畿大学を事例として～」をバックアップされた。

また、関西支部運営の面では、インターンシップ学会第16回大会が2015年9月に本学で開催される（4年に1度の関西支部が担当する順番）ことの布石として、2015年4月に関西支部運営委員に加わられた。その後、2018年3月（本学ご退任の時期）までの3年間、関西支部運営委員を務められた。辻先生は大変頼りになる関西支部運営委員であり、支部運営の円滑化に大いに寄与していただいた。

このほか、本部理事会から、高良<sup>こうら</sup>記念研究助成<sup>(5)</sup>の審査員を関西支部からも出すように要請されたときに、審査員を快諾していただいたこともあった。

(4) 関東支部は、2017年3月に名称を東日本支部に変更した。関東地方に限らず、東北や甲信越等の会員への便宜提供を考えたものである。

(5) 日本インターンシップ学会初代会長の高良和武先生（東京大学名誉教授）からの寄付をもとに、2005年度から毎年、若手研究者の優れた研究計画に対して研究助成を行っている（金額は1件あたり10万円）。その後、横本淳子先生からの高良記念への寄付も加わり、今日も研究助成が続いている。本学関係では、岩井貴美氏が2017～18年に、この研究助成を受けている。なお、高良記念助成審査員の名前は対外公表されていないため、辻先生が担当された時期を公表資料から特定することはできない。

## 第2章 第2回榎本記念賞での辻先生のご活躍

### 2-1 榎本記念賞とは

日本インターンシップ学会は、榎本淳子先生（初代関西支部長ほかの役職を歴任、大阪経済大学元教授）からの寄付をもとに、榎本記念賞を創設した。いかなる賞にするか、2011年度から榎本記念ワーキンググループで議論を重ねた結果、「秀逸なるインターンシップ」の事例を収集し、特に優れたものを表彰することになった。

榎本記念賞の第1回は、2015年の第16回大会（本学で開催）で授与された。対象は、2011年9月以降の4年間に学会大会または支部研究会で発表されたもの、などの要件を満たした事例である。具体的に表彰されたのは、以下の7事例<sup>(6)</sup>であった。

#### 【最も秀逸な事例】1事例

京都産業大学 「キャリア形成支援プログラムにおけるインターンシップ」

#### 【秀逸な事例】6事例

亜細亜大学 「アジア夢カレッジーキャリア開発中国プログラム」

嘉悦大学ビジネス創造部 「実践の場で学ぶインターンシップ教育」

東京大学大学院工学系研究科 化学システム工学専攻 「革新的インターンシップモデルの構築と実践（プラクティカルスクール）」

小樽商科大学 商学部 「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト（本気プロ）」

立命館大学 「文理連携型コーオプ教育（総合大学モデル）」

北九州市立大学 「地域創生実習」

なお、辻先生の支部研究会での発表（2013年8月、標題等は上記のとおり）も、このとき審査の対象になったが、僅差で表彰には至らなかった。審査の前に、榎本記念ワーキンググループから関西支部に対して、支部関連の「秀逸な事例」の推薦を求められたものの、大会の事前準備と重い校務負担（初年度で特に負担が重かった）のため、筆者が推薦文に

---

(6) 個別事例の詳細は、日本インターンシップ学会（2015）サイト内の事例別リンクをクリックすることで確認できた。また、榎本記念ワーキンググループの評価項目（理念・教育目標、制度、内容・シラバス、実施担当者、規模、受入先との連携、醸成される力、受入先からの評価、受講生の評価の9項目）と評価基準についても、同サイトに掲載されていた。

貢献する余裕が全くなかったこと<sup>(7)</sup>が大いに悔やまれる。

## 2-2 第2回榎本記念賞

榎本記念賞は2年に1度表彰するという制度設計になっているため、2017年4月に、榎本記念ワーキンググループから、各支部に「秀逸な事例」を推薦してほしいとの依頼があった（理事会で各支部4事例が目標とされた）。エントリーフォームが送られ、それを埋めて6月23日までに送付することが求められていた。関西支部（当時筆者は副支部長・会計）では、2016年の第11回支部研究会で発表された2報告と、2017年の第12回支部研究会で発表された2報告の計4事例を推薦することにした。具体的には、以下の事例である。

### 【2016年の支部研究会発表】 2事例

大阪経済大学「高い参加率を維持するインターンシッププログラムの実践内容—大阪経済大学の事例—」（発表者は中島美佐穂先生〈執筆時点では流通科学大学に移籍〉）  
豊橋創造大学「インターンシップの深化における豊橋創造大学の取り組み課題～事前・事後指導の改善と実習先企業の拡大～」（発表者は見目喜重先生）

### 【2017年の支部研究会発表】 2事例

近畿大学「低学年インターンシップ教育の取り組み評価～近畿大学を事例として～」（発表者は岩井貴美氏〈商学研究科 院生&経営学部キャリアサポーター：当時〉）  
和歌山大学「インターンシップ実践例と質を向上するための仕組みづくり～学生向け・企業向けのワークシートの開発～」（発表者は木村亮介先生）

上記4事例中、本学分を除く3事例については、エントリーフォームのうち発表資料やテープ起こしに基づいて書ける項目は筆者が執筆し、不明で書けない項目は発表者に埋めて貰う方式をとった。他方、本学分のエントリーフォーム執筆については、当時筆者が6月の支部研究会の運営や、重要な校務（3年目ながら繁忙期が想定外の6月にシフト）などで多忙だったことから、辻先生にお願いしたところ、ご快諾いただいた。

辻先生からは、エントリーフォームのうち「推薦者からのコメント」欄のみ空欄で、他の項目を緻密に書き込まれた文案を送っていただいた。そこで、筆者が「推薦者からのコ

---

(7) 関西支部では、毎回、支部研究会の発表内容についてテープ起こしを行っている（学生にアルバイトとして依頼）。審査該当期間中の支部研究会での発表のテープ起こし原稿を、当時の榎本記念ワーキンググループ委員長（田中宣秀先生）に提供し、関西支部の推薦文を書いていただいた。筆者が肉体的に非常に苦しかった時期の田中先生のご厚意に、深く感謝している。

メント」を以下のとおり執筆して、榎本記念ワーキンググループに提出した（最終的な本学分のエントリーフォームは、別添1のとおり）。この推薦文は、辻先生のご尽力で提出できたものであり、筆者が肉体的・精神的に非常に苦しかった時期に辻先生に助けていただいたことに、深く感謝している。

【推薦者からのコメント】

担当教員とは別に、キャリアサポート・オフィスというインターンシップをバックアップするための仕組み作りに成功し、教員と共同で成果を挙げている点が注目している。

また、それを基盤に、2016年度からは1年生からの低学年インターンシップに挑戦したことも特筆すべきである。2016年度には、旧カリキュラムの2年生と新カリキュラムの1年生を同時にインターンシップに派遣したことから、両者の比較が可能となっている。功利的な高学年のインターンシップ参加者と比べて、低学年インターンシップ参加者には、学びたいという純粋な意欲が高く、受入企業からも好評価を受けている。今後の低学年インターンシップを考える上で、非常に有益な先行研究になったと考えられる。

榎本記念ワーキンググループでの慎重な審議の結果、本学が「最も秀逸な事例」に選ばれたほか、4例が「秀逸な事例」に選ばれた（関西支部が推薦した和歌山大学を含む）。具体的な事例は、以下のとおりである<sup>(8)</sup>。

【最も秀逸な事例】 1 事例

近畿大学 「低学年インターンシップ教育の取り組み評価 ～近畿大学を事例として～」

【秀逸な事例】 4 事例

九州インターンシップ推進協議会 「産学官連携による地域の人材育成」

和歌山大学 「インターンシップ実践例と質を向上するための仕組みづくり～学生向け・企業向けのワークシートの開発～」

西九州大学 「体験型学修を通じて DP を具現化する取組～西九州大学におけるインターンシップの位置づけという観点から～」

---

(8) 榎本記念賞の結果は、「日本インターンシップ学会 NEWS LETTER 2017年度 NO.1」の10頁に掲載されている。本稿執筆時点では、日本インターンシップ学会の榎本記念賞のサイトに標題のみ掲載されている。



ものづくり大学 「インターンシップ事例報告 ～長期40日インターンシップと学生の将来についての一考察～」

これらについては、2017年8月31日～9月1日に開催された第18回大会（開催校は札幌国際大学／札幌国際大学短期大学部）で表彰され、支部研究会での発表者である岩井貴美氏が吉本圭一会長（当時）から表彰状を受け取った。その会場では、受賞理由として、楨本記念ワーキンググループからのコメントが以下のとおり上映された。

キャリアサポート・オフィスというインターンシップをバックアップするための仕組み作りに成功し、教員と共同で成果を挙げている点が注目に値する。それを基盤に、1年生からの低学年インターンシップに挑戦した。今後の低学年インターンシップを考える上で、非常に有益な先行事例となることが考えられる。

ここで、キャリアサポート・オフィス<sup>⑨</sup>とは、経営学部内の組織であり、社会人経験が豊富なキャリアサポーターの皆様（2016年度は10名、2017年度は7名）のご協力を得て活動している。オフィスは21号館の5階にあり、多数のパソコンや千冊以上の進路関係の書籍を備えている。その中で、担当教員やキャリアサポーターが経営学部生の進路相談に乗るほか、キャリア・マネジメント学科の授業「ビジネス・インターンシップⅠ・Ⅱ」のサポートも行っている。辻先生の前任の八木章先生が発案・設立され、辻先生が継承・発展させられた組織である。この仕組みが日本インターンシップ学会で高く評価され、表彰されたことは、関西支部の関係者として、また本学の同僚として、大変嬉しいことである。筆者が所属する本学経済学部には、キャリアサポート・オフィスのような組織は存在せず、キャリア教育専門の教員がいらないため発案すら難しいところである。キャリア・マネジメント学科を持つ経営学部ならではの優れた仕組みであるといえよう。八木先生、辻先生が築き上げて来られたこの素晴らしい伝統を、辻先生の後任になられた岩井貴美先生が受け継いで更に発展させられることを、心より祈念している。

---

⑨ キャリアサポート・オフィスの概要については、近畿大学経営学部（2019年時点）を参照。



### 第3章 本学開催の第16回大会での辻先生のご活躍

2015年9月12日（土）～13日（日）に日本インターンシップ学会第16回大会が本学EキャンパスB館で開催された。開催にあたり、筆者が大会準備委員長を務め、本学の八木先生（薬学部の非常勤）、辻先生（当時：経営学部）、新田和宏先生（生物理工学部）に準備委員をお願いした。このうち、新田先生は和歌山のキャンパスにおられるため、シンポジウムの司会などをお願いすることとし、同じキャンパスの八木先生、辻先生と筆者の3人で企画・運営プロジェクトチーム（以下ではPTという。）を立ち上げ、10回超のミーティングを行った<sup>00</sup>。

関西支部が担当した大会開催は、第12回大会（2011年）の鳥取大学に続く2回目だった。関西支部は私立大学主体の支部で、九州支部（吉本圭一先生〈九州大学〉の門下生などのネットワークが強力）や北海道支部（亀野淳先生〈北海道大学〉の人的ネットワークが強力）のように、核になる大学や多数の門下生を持つ教員が存在しないことが大会開催に当たってのボトルネックであると認識されていた。このため、関西支部は大会開催を辞退し続けていたが、4支部持ち回り開催の慣行が確立したことから、第12回大会で初めて開催を受諾したものである。

2回目である2015年については、開催校をどこにするか関西支部運営委員会で議論になったが、辻先生から「自分の在任中であれば、近畿大学での開催を支援できる。今しかない」と背中を押していただいたことを受けて、本学で引き受けることにした。辻先生からは、そのお言葉通り、献身的なご支援を賜り、大会開催に漕ぎつけることができた。

#### 3-1 大会プログラムの策定

PT内では、狭義の関西地方での開催は初めてなので、関西らしさをアピールする大会にしようということで意見がまとまった。そこで、大会のテーマ<sup>01</sup>を「地域協働・産学連携 ―関西のかたち」とすることに決めた。

次に、大会恒例の「基調講演」をどうするかが検討課題となった。前年度の第15回大会

---

<sup>00</sup> 筆者が2015年4月以降、不慣れな重要校務を担当することになった（学会開催等を理由に固辞したものの押し切られた）ため、前倒して3月までに大枠を固めた。4月以降は、予想通り多忙となり、議事録を残す余裕がなくなったため、ミーティングの回数は不確定のままである。

<sup>01</sup> 日本インターンシップ学会では、毎回の大会にテーマを設けている。過去の大会のテーマについては、日本インターンシップ学会（2018）に掲載されている。

では「基調講演」に代えて「学生による活動成果発表会」が開催されたことにヒントを得て、関西らしい「基調報告会」を開催しようということになった。この点に関しては、加藤先生が第2代支部長でいらした時期から、大学コンソーシアム<sup>(12)</sup>のインターンシップを含む活動が関西では非常に盛んである一方、他地域ではよく知られていないので、関西で活躍している3つの大学コンソーシアム（図表1）のインターンシップ担当者を招いて揃い踏みで講演してもらいたいという夢があった。筆者からPTにこの夢を語ったところ、八木先生と辻先生のご了解をいただき、3コンソーシアム<sup>(13)</sup>から代表者を派遣してもらうことになった。また、八木先生から「2013年の第8回関西支部研究会での大学生協の方の報告<sup>(14)</sup>が面白かった」とのご意見があり、大学生協の方にも発表してもらうことになった（結果的には、コンソーシアムのない地域の地方公立大学〈下関市立大学〉で生協が果たしている補完的なお取り組みなどを話していただいた）。最終的に、4報告の持ち時間を各30分、合計120分とすることになった<sup>(15)</sup>。大会開催後、他支部所属の参加者から、「大学コンソーシアムや生協がインターンシップで活躍していることは知らなかった」などの声が多数寄せられた。

（図表1） 関西を代表する3つの大学コンソーシアムの概要

	法人格	設 立	大学・会員数	所在地
大学コンソーシアム京都	公益財団法人	1993年3月	51大学	京都市
大学コンソーシアム大阪	特定非営利活動法人	1999年	44大学	大阪市
南大阪地域大学コンソーシアム	特定非営利活動法人	2002年7月	団体12+個人9	堺市

資料）各コンソーシアムのホームページ（2015年時点）

さらに、PT では、もう一つの大会恒例の「シンポジウム」をどうするかが大きな検討課題となった。テーマを「大阪・兵庫・和歌山での地域連携の実例」とすること、司会を新田先生にお願いすること、和歌山のパネリストを新田先生に推薦していただくこと、は

(12) 大学コンソーシアムには全国協議会があり、その事務局を大学コンソーシアム京都が務めている。全国の主な大学コンソーシアムは、大学コンソーシアム京都（2019年時点）に掲載されている。

(13) 筆者は2012年度より大学コンソーシアム大阪の大学間連携部会単位互換実務委員長などを務めており、インターンシップ部会の活躍ぶりを側聞していた。そこで、大学コンソーシアム大阪の事務局にお願いして、報告者を推薦してもらった。京都と南大阪地域の大学コンソーシアムとのコンタクトにあたっては、PT 外の会員にお世話になった。

(14) テーマは「大阪府立大学生協の出発（たびだち）サポートプログラム実施状況報告～下級生を支える先輩サポーターの活動と、生活ポートフォリオの活用について～」、発表者は吉川育宏氏（大学生協阪神事業連合 学びと成長事業部 部長〈当時〉）と田原靖之氏（全国大学生協 学びと成長事業推進会議 事務局〈当時〉）。

(15) 大会開催後、基調報告会とシンポジウムの模様は、テーブル起こしの上、報告者やパネリストに確認してもらったものを日本インターンシップ学会（2016）の「大会の部」に掲載した。

早い段階で決まった。また、大阪府のパネリストについては、辻先生から「大阪商工会議所のような大規模な組織よりも、商工会クラスで身動きの軽い組織の方が手厚いインターンシップを実施している」とのご指摘があり、経営学部の学生がお世話になっている羽曳野市商工会と協力企業を紹介していただいた。他方、兵庫県のパネリスト選定が最後まで難航したが、辻先生から「神戸新聞社が地元企業と大学のゼミをマッチングさせるMラボという興味深いお取組をされている」との情報をいただき、神戸新聞社の方にパネリストをお願いすることになった。大会開催後、他支部からの参加者から、「関西らしい取組みだった」、「地元新聞社がインターンシップなどで活躍していることは新しい知見だった」などの声が寄せられた。これも、司会をされた新田先生と、適切なパネリストを紹介してくださった辻先生のおかげと、深く感謝している。

このほか、当時は恒例だった大会のエクスカージョン（2016年の第17回大会から廃止）については、八木先生から奈良市内の古民家を活用した話題の喫茶店に案内する「ならまちツアー」をご提案いただいた。筆者が提案した「司馬遼太郎記念館見学」も了承され、大会終了後、八木先生が「ならまち」を、筆者が「司馬遼太郎記念館」を案内することになった。辻先生が大会終了後の撤収作業をバックアップして下さるという信頼感から実現できたエクスカージョンであった。両方とも10人前後の参加者があり、関西らしいと大好評だった。

このようにして PT で練り上げたプログラム（報告者やパネリスト等を掲載）は、別添 2 に掲載している。

### 3-2 大会の事前準備

日本インターンシップ学会の大会では、大会ホームページを作成・更新するほか、論文募集の呼びかけ、「大会開催要項」（冊子）の作成・印刷・全会員への送付（送付用封筒の作成も必須）、「発表要旨集録」（冊子）の作成・印刷、大会参加費や懇親会費の受領・領収証の作成などの膨大な事務を開催校が負担する慣例がある。このうち、第16回大会ホームページの作成・更新<sup>⑥</sup>、論文募集の呼びかけ、「大会開催要項」の原稿作成については筆者が担当した。

しかしながら、筆者が4月以降重い校務負担を背負ったことから予想通り時間と体力を消耗し、「大会開催要項」の印刷・全会員への送付、「発表要旨集録」の作成・印刷、大会

⑥ 当時のホームページは、日本インターンシップ学会第16回大会事務局（2015）を参照。「大会開催要項」、「報告会と趣旨」、「シンポジウムの概要」などを掲載している。

参加費や懇親会費の領収証の作成などの膨大な事務にまで筆者の手が回らなくなった。「折角 PT の皆様のおかげで良い案ができたのに、これで万事休すだ」と諦めかけていた<sup>(7)</sup>ときに、辻先生が救いの手を差し伸べて下さった。当時、経営学部キャリアサポート・オフィスの職員でいらした久米弥生さんを第16回大会実行委員会の事務に投入して下さいだったのである。

久米さんは、事務処理能力が非常に高いベテランで、学会大会の運営や印刷事務にも通曉されていた。上記の膨大な事務を明るく的確かつ迅速に処理して下さい、みるみるうちに懸案が片付いていった。出席予定者リスト（参加費や懇親会費の事前受領の有無を含む）の作成や、参加者用の名札の準備なども手際よく進めて下さった。辻先生のご英断と、久米さんのご尽力がなければ、大会開催に漕ぎつけることは到底できなかったと思う。

なお、久米さんは、翌2016年度には、キャリア・マネジメント学科のインターンシップ科目の配当学年低学年化により、旧カリキュラムの2年生と新カリキュラムの1年生と、例年の2倍の学生をインターンシップに送り出すにあたっても、手腕を発揮された。第2章で触れた槇本記念賞受賞を事務処理面でサポートされていた訳である。ご退職前の相次ぐ大きなご貢献に、改めて敬意を表したい。

### 3-3 大会の当日事務運営

大会当日には、2日間で152人（非会員を含む）の参加者があった。大会受付や会場のパソコン管理等は、主として学生アルバイト14人に依頼したが、筆者は「基調報告会」の司会や「シンポジウム」の後方事務に忙殺されて、十分な学生ケアができなかった。学生アルバイトは学会事務に慣れていないことから、八木先生と辻先生が大会事務全般をバックアップして下さい。また、当日参加者の参加費（5千円）・懇親会費（同）などの出納事務はキャリアサポート・オフィスの久米さんと仮屋久美さんが担当して下さい（後に決算したところ一円の狂いもなかったのには大いに感心した）。また、学会大会事務に心得のある経済学部の山根承子先生と荒木宏子先生も大会運営を手伝って下さった<sup>(8)</sup>。大

(7) 本学会の他の大会では、キャリアセンターや就職部が大会事務をサポートする事例が多いが、本学の場合は不運なことに、「2015年には面接開始時期が8月からと前年より2か月後ろ倒しになるため、学生サポートを優先せざるを得ないことから、学会大会事務の手伝いにまで手が回らない」とキャリアセンター幹部から事前に釘をさされていた。もっとも、大会当日には、キャリアセンター職員が「シンポジウム」に出席され、録音などを手伝って下さったほか、懇親会での開催校挨拶をキャリアセンターの藤原昭彦事務部長代理が務めて下さった。

(8) 山根先生は、所属される行動経済学会の第9回大会が2015年11月28日～29日に本学経済学部で開催されることから、練習の意味で手伝って下さった。また、荒木先生は、インターンシップという取り組みがご専門の応用ミクロ経済学（労働・教育）に近いことから、快く手伝って下さった。

会開始時の繁忙期には、受付事務に多少の混乱があった（会員への「発表要旨集録」の配布漏れなど）が、大過なく終了できたのは、辻先生を始め皆様のおかげと深く感謝している。また、懇親会では、本学学生部経由でお願いして来てもらった吹奏楽部（2015年の全国大会で金賞を受賞）の約20人が軽快な楽曲を披露してくれ大好評を博したが、吹奏楽部の窓口担当者は辻先生のゼミ生であった。不思議な縁を感じた。

また、受付事務の繁忙が一服してからは、辻先生はフットワーク良く会場の写真を沢山撮って下さった。「シンポジウム」については、後日、学会の機関誌「インターンシップ研究年報」の「大会の部」に写真を掲載する必要性が生じたが、辻先生が撮って下さった写真が大いに役立った。

大会終了後は、当時恒例のエクスカージョン案内のため、八木先生と筆者は会場を離れることとなったが、片付けや撤収の事務は、辻先生、久米さん、仮屋さん、山根先生、荒木先生が担当して下さい。皆様に手堅く対応していただき、深く感謝している。

#### 第4章 日本インターンシップ学会関西支部の課題

2019年は、関西支部が大会開催を担当する3回目にあたる。第4代関西支部長の廣瀬先生のもと、交通の便の良い立命館大学大阪いばらきキャンパスで第20回大会を開催することを2019年4月まで予定していたが、廣瀬先生の体調不良等から、急遽、本学のアカデミックシアターに会場を変更することになった。もっとも、日程（8/31日～9/1日開催）や廣瀬先生が理工学部で担当された「産学国際協働PBLの長期インターンシップ」<sup>⑨</sup>に関連して決定されたテーマ「グローバルな産学連携」は予定どおりとすることになっている。筆者は、関西支部長代行に就任し、大会実務も担っている。

廣瀬支部長を支えて第20回大会を成功させるために、関西支部の役員が第16回大会での貴重な経験を活かして、しっかりとしたサポート体制を作り上げ、懸命に準備作業を進めている。その際には、2015年に辻先生が果たして下さい大きなご貢献に思いを致す必要がある。また、久米さんが残して下さい貴重な資料を活用しなければならない。

また、「4支部体制」が続く限り、第24回大会なども関西支部に回ってくるが、支部内では、大会開催を受け入れてくれる大学がなかなか見つからないのが実情である。第20回

---

⑨ 廣瀬先生は立命館大学世界展開力強化事業の中の「RU-IITH産学国際協働PBLプログラム」を担当され、インド工科大学ハイデラバード校（IITH）と共同でインドにおける課題について調査・検討し、各課題の解決策を提言されていた。詳しくは、立命館大学（2019年時点）を参照。

大会を成功させることにより、会員数の少ない大学でも大会開催が可能となる関西支部モデルを作り上げていきたい。

参考ホームページ いずれも執筆時点のアドレス

- 近畿大学経営学部（2019年時点）「経営学部独自の支援を展開 キャリアサポート・オフィス」  
(<https://www.kindai.ac.jp/keiei/career/support.html>)
- 大学コンソーシアム京都（2019年時点）「全国大学コンソーシアム協議会事業（事務局運営）」  
(<http://www.consortium.or.jp/project/zenkoku-conso/office>)
- 日本インターンシップ学会（1999）「設立趣意書」(<http://www.js-internship.jp/syuisyo.html>)
- 日本インターンシップ学会（2015）「楨本記念賞『秀逸なるインターンシップ』—2015」  
(<http://www.js-internship.jp/makimotokinen/makimotokinen-2015.html>)
- 日本インターンシップ学会（2017）「日本インターンシップ学会 NEWS LETTER 2017年度 NO.1」  
([http://www.js-internship.jp/newsletter/JSI\\_NL\\_2017no1.pdf](http://www.js-internship.jp/newsletter/JSI_NL_2017no1.pdf))
- 日本インターンシップ学会（2018）「日本インターンシップ学会 第19回大会」  
(<http://www.js-internship.jp/taikai.html>)
- 日本インターンシップ学会 第16回大会実行委員会事務局（2015）  
(<http://www.eco.kindai.ac.jp/abiko/jsi2015.htm>)
- 文部科学省・厚生労働省・経済産業省（2014）「インターンシップ推進に当たっての基本的考え方新旧対照表」([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2014/04/18/1346604\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/04/18/1346604_02.pdf))
- 文部科学省・厚生労働省・経済産業省（2015）「インターンシップ推進に当たっての基本的考え方新旧対照表」([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2015/12/15/1365292\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2015/12/15/1365292_02.pdf))
- 文部科学省・厚生労働省・経済産業省（2017）『「インターンシップの更なる充実に向けて議論の取りまとめ」等を踏まえた「インターンシップ推進に当たっての基本的考え方」に係る留意点について ～より教育的効果の高いインターンシップの推進に向けて～』([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/02/14/1365292\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/02/14/1365292_3.pdf))
- 立命館大学（2019年時点）「RU-IITH 産学国際協働 PBL プログラム」  
(<http://www.ritsumeit.ac.jp/reinventindia/program/detail.html/>)

参 考 文 献

- 日本インターンシップ学会（2011）『「日本インターンシップ学会」～10年の記録』インターンシップ研究年報 特別記念号 (<http://www.js-internship.jp/jyunenshi/jyunenshi.pdf>)
- 日本インターンシップ学会（2016）「インターンシップ研究年報」（第19号）

## 別添 1 榎本記念ワーキンググループに関西支部が提出した推薦文

大学名	近畿大学		
発表題目	低学年インターンシップ教育の取り組み評価 ～ 近畿大学を事例として ～		
発表者又は代表者	岩井貴美 (商学研究科 院生+経営学部キャリア サポーター)	発表日時	2017年 6 月 9 日
		全国・支部	支部
学部・学科	経営学部	選択・必修区分	選択
科目名	「ビジネス・インターンシップⅠ・Ⅱ」		
単位数	各 2 単位	対象となる年次	1 年次が中心
受入企業数	100社 (2016年度に経営学部キャリアサポート・オフィスから派遣した学生を受入れた企業数)		
参加学生数	285名 (2016年度に経営学部キャリアサポート・オフィスから派遣した学生の参加学生数)		
実施時期	履修期間は同一年度の前後期、実習は夏期休暇期間中		
実施期間	10日間前後		
制度・組織	<p>■近畿大学のインターンシップの概要</p> <p>近畿大学のインターンシップ派遣は、2016年度全学で1,538名。各学部が独自に派遣したものが897名と全体の 6 割を占め、他はキャリアセンターからの派遣と個人の直接応募によるものである。経営学部の派遣数は395名。内経営学部のインターンシップ教育支援と進路指導を行うキャリアサポート・オフィス（以下 CSO と略す）からの派遣が285名である。</p> <p>その中で経営学部は、キャリア・マネジメント学科がインターンシップ教育の基礎編である「ビジネス・インターンシップⅠ・Ⅱ」（以下 BI-Ⅰ・Ⅱ と略す）を CSO の協力を得て 1 年間で掛けて行っている。また経営学部は、キャリアセンター主催の全学インターンシップ事前教育のカリキュラム・教材を準備し、講師を派遣するなど、本学インターンシップ教育において中核的な役割を果たしている。</p> <p>■経営学部キャリア・マネジメント学科のインターンシップ教育</p> <p>「BI-Ⅰ・Ⅱ」は、前期に夏期実習に向けた準備を行い、夏期に実習、後期に実習を振り返り、今後取り組む課題を明確化する、年間で PDCA の管理のサイクルを回す科目である。</p> <p>キャリア・マネジメント学科では、インターンシップで得た様々な気づきを大学での履修に長期間反映させるとともに、近年就活目的で 3 回生を中心に行われる短期のインターンシップの進展に現実的に対応するため、科目履修対象学年を見直した。2016年度からは「BI-Ⅰ・Ⅱ」の対象学年を、前年度までの 2 回生以上を 1 回生以上へと変更。そして、上級編の「アドバンス・インターンシップ」教育を 3 回生以上から 2 回生以上へと変更した。</p> <p>2016年度は、「BI-Ⅰ・Ⅱ」に従来の 2 回生以上と初参加の 1 回生が履修する過渡期であった。そのため、両学年間の差異や共通点などを比較検討できる興味深い年度となった。</p>		

※教育としての位置づけやリスクマネジメント等、学校全体でどのように取り組まれているかについてお書きください



<p>運用</p> <p>※教員独自による運用ではなく、教職員、受け入れ先等を含めて、どのように組織的かつ熱心に取り組んでいるかお書きください。</p>	<p>■インターンシップ教育におけるサポーターの役割</p> <p>経営学部インターンシップ教育の最大の特徴は、CSOに勤務するキャリアサポーターの存在と活躍（2016年度は10名、2017年度は7名）である。</p> <p>サポーター毎に受入企業を予め分担しているため、実習先が決定した学生は、自動的に担当サポーターが決まる仕組みである。学生はサポーターと事前面談を行い、実習先企業の概要や必要な心構え・準備を確認している。次いで、サポーターは夏期休暇前後に学生同伴で、実習先を事前訪問。実習生を受入企業担当者に紹介し、実習内容や期間中に取り組むテーマ研究の課題等の打合せを行う。その後サポーターは実習中可能な限り実習先を訪問し、最終日の企業内での最終報告会にも参加している。</p> <p>さらに後期授業開始とともに、学生と事後面談を行い、実習を振り返り成果を確認。その上で各人の課題や改善点などを明確にしている。10月下旬の成果報告会後の企業交流会では、企業関係者と学生は担当サポーターのテーブルに集合するようにしており、ここでもサポーターは企業と学生・大学を繋ぐ連結ピンの役割を果たしている。</p> <p>サポーターは「BI-I・II」の授業にも、自己紹介や実習後の疑問点解消、来年度に向けたアドバイス等の目的で年3回は登板。実習先の新規開拓・学生とのマッチング、実習の目標設定と振り返り、翌年度の教育プログラム内容見直し、受入先企業向けの「インターンシップ白書」作成、全学インターンシップ事前教育講義担当、CSO 開催の「キャリアサポート講座」企画・運営等、広範な領域に関わっている。学生の実情を身近に知るサポーターらしい活躍である。</p> <p>■進路指導におけるサポーターの役割</p> <p>サポーターは長年企業で人事業務等の経験を積んだ方々である。そのため、実習を経験した学生は、その後の進路や就職に関して気軽にサポーターに相談に来るようになる。経営学部生自身の成長課題について熟知したサポーターの支援は極めて有効である。</p> <p>■コーディネイターとファシリテーターとしてのサポーターの役割</p> <p>このようにサポーターは、企業と教員、学生間を最適な状態に調整するコーディネイターと、授業・実習と連携、学生の理解を促進するファシリテーターとしての役割を有している。</p>
<p>受入先との連携</p> <p>※協働先とし連携する際にどのような関係性を構築されているのかや、継続性等についてお書きください。</p>	<p>■支援者となっていたい企業経営者・管理者の存在</p> <p>インターンシップ受入企業の大半を占める長期継続的な受入企業には、本学部インターンシップ教育に理解を示していただけており、サポーターを通して大学との関係構築ができています。それら企業は、「若者たちの育成は社会の役割」と考える企業経営者・管理者のおられる企業である。</p> <p>■サポーターによる企業への低学年受入要請</p> <p>インターンシップを実習生の受入企業への就職に繋げたいという「採用目的」の企業には、従来から2回生の実習受入要請は困難だった。それがいずれ1回生中心となることを踏まえると、「大学生の学び支援」に対して理解のある企業でなければ依頼できなかった。その中で、低学年の学生受入を粘り強く要請したのはサポーターである。</p> <p>一部に採用目的を含めたい、あるいは就職を真剣に意識する学年に限定したいと考えられた企業には、受入を3回生以上と限定することで対応した。</p>

<p>醸成される力</p> <p>※専門能力または汎用能力など、本事業で学生のどのような能力等が醸成されたのかについてお書きください。</p>	<p>■社会人基礎力調査結果</p> <p>実習前後で学生の社会人基礎力の自己評価を見ると、実習後に実感値は伸長している。またそのことは、実習後の後期授業での学生の言動に少なからず現れている。</p> <p>「3つの能力」中、実習前後での学生評価の最高は「チームで働く力」。また実習後伸長幅が最大のものが「前に踏み出す力」。学生自身が最も劣ると考えている能力要素は、実習前後ともに「前に踏み出す力」では「働きかけ力」、「考え抜く力」では「創造力」、「チームで働く力」では「発信力」である。</p> <p>実習では自ら環境に働き掛け、社内規則を守らない限り、成果は得られないため、「主体性」や「課題発見力」「規律性」が強く意識され、高スコアとなっている。</p> <p>ここ数年間の実習後の学生の自己評価と企業の評価結果を見ると、3つの能力の内「前に踏み出す力」と「考え抜く力」では、学生と企業の評価で大きな違いはない。しかし「チームで働く力」の企業評価では、学生最高の「規律性」が中位でむしろ「傾聴力」が最高となっており、学生と社会人との「常識の違い」と考えられる。</p> <p>学生の自己評価では、総平均で1回生の評価結果は2回生以上のそれを下回っている。さらに企業評価を見ると、1回生は全ての能力要素について2回生以上を下回る評価。1回生はこの時期アルバイトも経験せずに実習に臨んでおり、当然の結果ともいえる。</p>
<p>受入先からの評価</p> <p>※学生の行動や能力等について受け入れ先からどのような評価を受けているのか、具体的な事象やデータ、証言も踏まえつつお書きください。</p>	<p>■社会人基礎力調査結果</p> <p>近年の傾向では、社会人基礎力の3つの能力区分において学生が最も劣ると考えている能力要素は、前述のとおりである。ところが、企業評価で最も低い能力要素は、3能力区分毎にそれぞれ「働きかけ力」、「計画力」、「ストレスコントロール力」となっている。</p> <p>■インターンシップ受入企業担当者への聴取調査結果</p> <p>大半の企業がインターンシップに「満足」との回答を得ている。特に1回生では企業側も研修プログラム遂行に懸念があったが、結果的に問題もなくプログラムを終了した。</p> <p>高学年の学生に比べ、「社会の仕組みを学びたい」「社会人としてのマナー、ルールを学びたい」など基本的な学びを望んでいるため、学びたい気持ちが研修態度に出ていた。</p> <p>また、実習を受入れる企業側のメリットとして、「部署の活性化」「一緒に働く従業員のキャリアの振返り」「業界の認識」などが挙げられていた。</p>
<p>受講生の評価</p> <p>※参加した学生からどのような評価を受けているのか、具体的な事象やデータ、証言も踏まえつつお書きください。</p>	<p>■社会人基礎力調査結果</p> <p>1回生にあった特徴は、実習前後で総平均が共に低かったこと。このことから社会に対する無知を謙虚に認め、実習に真面目に取り組んだことが窺える。また「前に踏み出す力」で「実行力」、「考え抜く力」で「計画力」、「チームで働く力」で「傾聴力」が大きく向上。そこからは、課題を進めるため仕事の基本である計画と傾聴に意識して実行せざるを得なかった事情や、実習後により目的に沿う行動を取るようになった姿が想像される。</p> <p>■授業評価での自由意見</p> <p>「興味深いお話が多く、今後に活かせる」「今後の学生生活の過ごし方を分かり易く説明された」「この授業でないと聞けない話が聞けた」「色々な人の話が聞け、自分の将来を考えることができた」「就活を早めに意識できた」など好反応が多い。</p>

<p>その他特記事項</p>	<p>■本学科の特徴「テーマ研究」</p> <p>本学科では、実習で「テーマ研究」を課している。これは社会人基礎力の企業評価で3つの能力区分毎に最も劣る能力要素である、「働きかけ力」、「計画力」、「ストレスコントロール力」の強化を狙ったものである。テーマ研究にはこれら全てが要求され、取組み過程で向上が期待できると考えている。</p> <p>「働きかけ力」には関係者に働きかけ自分の意図する方向にその人たちを巻き込む行動が、「計画力」には正解のない解を自分で考え課題の解決プロセスを明らかにする事前準備が、「ストレスコントロール力」にはストレスの発生源となる周囲の多様な人たちとの人間関係づくりが重要となるからである。</p> <p>■インターンシップ後の受講生アンケート調査結果</p> <p>大学生のインターンシップ観には「学び中心的」と「功利的」な考えがあり、高学年ではインターンシップ観が学び中心的でなくなることが分かった。インターンシップ観が学び中心的であるほど、インターンシップに対する考えが主体的であり、大学授業の学修態度も積極的である。一方、インターンシップ観が功利的なほどインターンシップに対しての考えが他律的になり、大学授業の学修態度も消極的であるという結果が出ている。</p> <p>低学年インターンシップは、キャリア教育と就業体験を結び付けた純粋な教育の提供ができる、主体的な職業選択や職業意識の育成に効果的、自主的に考え行動できる人材育成の期間が確保できる等、大学にとっても効果的の取り組みである。学びたい気持ちが高いためインターンシップに主体的になる、将来設計の土台作りができ準備に時間を掛けられる、自ら将来設計に合わせた参加計画が立てられる等、学生への教育的効果が挙げられる。</p> <p>高学年ではインターンシップの目的が業界の見極めや職業適性に集中する傾向にある一方、学びへのモチベーションが高い低学年にこそ、多くの学びや気づきができる機会提供が重要であり、キャリア教育の一環であるインターンシップ本来の目的があるといえる。</p> <p>また、「大学生の自ら学ぶ意欲」に関しては、職場における他者からの仕事支援と精神的支援と関連性があり、支援が高いほど学びを深め、自ら学ぼうとし、目標達成しようとしている。その結果、授業への興味、将来の職業を考える、大学生生活を有意義に過ごそうとしていることが分かった。</p>
<p>推薦者からのコメント</p>	<p>担当教員とは別に、キャリアサポート・オフィスというインターンシップをバックアップするための仕組み作りに成功し、教員と共同で成果を挙げている点が注目に値する。</p> <p>また、それを基盤に、2016年度からは1年生からの低学年インターンシップに挑戦したことも特筆すべきである。2016年度には、旧カリキュラムの2年生と新カリキュラムの1年生を同時にインターンシップに派遣したことから、両者の比較が可能となっている。功利的な高学年のインターンシップ参加者と比べて、低学年インターンシップ参加者には、学びたいという純粋な意欲が高く、受入企業からも好評価を受けている。今後の低学年インターンシップを考える上で、非常に有益な先行研究になったと考えられる。</p>

日本インターンシップ学会での辻隆久先生のご足跡（安孫子）

別添 2 日本インターンシップ学会 第16回大会のプログラム

大会プログラム（1日目）

【9月12日（土）】		
12：00～	受付（実行委員・学生）	B館1階エントランスホール
（ご参考）	昼食（生協の食堂〈11月ホールB1階〉をご利用いただけます）	
12：30～12：45 （15分）	<b>【開会式】</b> 会長挨拶 吉本 圭一（九州大学） 歓迎挨拶 増田 大三（近畿大学 副学長）	B館1階101教室  総合同会（実行委員）
12：45～14：45 （120分）	<b>【基調報告会】</b> 大学コンソーシアム京都 講師 同志社大学 教授 多田 <sup>みのる</sup> 氏 大学コンソーシアム大阪 講師 大阪経済法科大学 教授 深瀬 <sup>きよし</sup> 澄 氏 大阪教育大学 特任准教授 田崎 悦子 氏 南大阪地域大学コンソーシアム 講師 コーディネーター 難波 祐美 氏 大学生協 学びと成長事業協議会 講師 事務局長 山本 <sup>もとむ</sup> 求 氏 下関市立大学生協 専務理事 中井 <sup>まさる</sup> 傑 氏 報告者紹介（実行委員）	B館1階101教室
14：45～15：45 （60分）	<b>【総会】</b>	B館1階101教室
15：45～16：00 （15分）	<b>【休憩・公開準備】</b>	
16：00～18：00 （120分）	<b>【シンポジウム】（非会員にも公開します）</b> テーマ「大阪・兵庫・和歌山での地域連携の実例」 羽曳野市商工会 事務局長 杉本 茂樹 氏 阪本織布株式会社 代表取締役 阪本 壮一 氏 株式会社神戸新聞社 地域総研企画調査部 次長 箸本 史朗 氏 株式会社早和果樹園 取締役専務 秋竹 俊伸 氏 司会 新田 和宏（近畿大学 准教授）	B館1階101教室
すぐに懇親会場へ移動 （信号を渡って11月ホールB1階の食堂 Cafeteria November へ）		
18：10～20：10 （120分）	<b>【懇親会】（非会員にも公開します）</b> 会長挨拶・乾杯 開催校挨拶（近畿大学） 藤原 昭彦 キャリアセンター事務部長代理 懇親会司会（実行委員）	Cafeteria November

## 大会プログラム（2日目）

【9月13日（日）】 自由研究発表				
8：30～	受付（実行委員・学生） 前日に受付をされた方は直接会場へお入りください。           B館1階エントランスホール			
会場	A会場 (B館1階101教室)	B会場 (B館2階204教室)	C会場 (B館4階402教室)	D会場 (B館4階403教室)
	現場力を考える 古田克利 (関西外国語大学)	海外インターンシップ 田中宣秀 (電気通信大学)	事例報告Ⅰ 亀野淳 (北海道大学)	特徴的なインターンシップ 高橋秀幸（北海道武蔵女子短期大学）
9:00～9:30	A-1 農村滞在・職住一体型インターンシップの体験日数適切感と効果の関係 田崎 悦子 (大阪教育大学)	B-1 大学教育における海外インターンシップの役割 河合 理英子 (D.O.A.Australia Pty.Ltd.)	C-1 PBL型インターンシップ導入の効果について（事例研究） 宮本 伸子 (ものづくり大学 学務部)	D-1 社会科学系分野における専門対応型インターンシップ 坂巻 文彩 (九州大学大学院 人間環境学府 大学院生)
9:30～10:00	A-2 企業から見たキャリア～異業種インターンシップの取り組み 【気づき＝自己改革・心＝感謝】～ 菊池 将人 (菊池経営研究所)	B-2 就業体験としての海外インターンシップとワーキング・ホリデーの比較考察 酒井 佳世 (久留米大学)	C-2 学校現場での就業体験を巡る今日的課題② ―就業体験としての「学校支援ボランティア」の在り方を巡って― 山口 圭介（玉川大学）	D-2 自由応募型インターンシップについての一考察 川端 由美子 (お茶の水女子大学)
10:00～10:30	A-3 雇用レジームの変容と短期インターンシップの「現場力」 新田 和宏 (近畿大学)	B-3 中国、東南アジアのインターンシップ 那須 幸雄 (文教大学)	C-3 『企業活動スタディーコース』の事例報告 粟野 武文 (山形大学)	D-3 工学系大学におけるインターンシップの特徴～インターンシップで言われていることは工学院系大学にあてはまるのか？工学院大学を事例として検証する 二上 武生（工学院大学）
10:30～10:40	会場移動・休憩（10分）			
会場	A会場 (B館1階101教室)	B会場 (B館2階204教室)	C会場 (B館4階402教室)	D会場 (B館4階403教室)
	中小企業インターンシップ 新田和宏 (近畿大学)	海外の職業教育 那須幸雄 (文教大学)	事例報告Ⅱ 田崎悦子 (大阪教育大学)	教育効果 眞鍋和博 (北九州市立大学)
10:40～11:10	A-4 低学年を対象とした「短期中小企業インターンシップ」の取組 松坂 暢浩 (山形大学)	B-4 カリキュラム比較による観光人材教育の世界的潮流の研究 根木 良友 (玉川大学)	C-4 大学内キャリアサポート・オフィスにおける個別キャリア支援～学生担当型キャリアサポーターの個別キャリア支援の実態と課題～ 高道 正能（近畿大学キャリアサポーター）	D-4 実践的インターンシップにおける社会構成主義手法の有効性に関する考察 新目 真紀 (職業能力開発総合大学校)

日本インターンシップ学会での辻隆久先生のご足跡（安孫子）

11:10～11:40	<p>A-5 中小企業インターンシップにおけるコーディネーターの役割に関する考察</p> <p>松浦 俊介 (信州大学)</p>	<p>B-5 イギリスの職業教育の現状と課題～Wolf 報告の提言とわが国施策のあり方を念頭に</p> <p>田中 宣秀 (電気通信大学)</p>	<p>C-5 大学コンソーシアム大阪「あべの・天王寺まちづくり活性化プロジェクト」インターンシップにみる学生成長要因の分析</p> <p>山路 崇正 (大阪経済法科大学)</p>	<p>D-5 インターンシップによる教育効果についての考察</p> <p>三浦 一秋 (山梨英和大学 学生サービス部)</p>
11:40～12:10	<p>A-6 中小企業におけるインターンシップの現状と課題～採用定着に資するインターンシッププログラム構築に向けて～</p> <p>古閑 博美 *1 (嘉悦大学)</p>			

12:10～12:20	会場移動・休憩（10分）
-------------	--------------

12:20～12:30	閉会の挨拶      日本インターンシップ学会 会長
-------------	----------------------------

<p>■共同発表者</p> <p>*1 牛山 佳菜代 (目白大学 准教授)</p>
---

※閉会后、「司馬遼太郎記念館見学」と「ならまちツアー」の2種類のエクスカージョン・ツアーを予定しております（両方参加はできません）。